ポケットモンスター　～真理と心理～

アルス・フォビリアーン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケットモンスター　～真理と心理～

【Ｎコード】
Ｎ９６３６Ｔ

【作者名】
アルス・フォビリアーン

【あらすじ】
始めまして。これはポケットモンスター　ブラックホワイトの小説です
この小説は「僕がＢＷ内で感じたこと、思ったこと」を描いていくつもりです。　なお、ゲームのストーリーを少々誇張して、イベントを増やしたりしています

誤字脱字・厳しい評価・助言大歓迎です
※カラクサタウンが抜けてしまっていますが　カラクサタウンの存

在を
忘れてしまっただけです　すみません

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｂｕｒａｄｅｌｉｎｉｎｅ
ブログで作成したものをそのままここにコピーしているので
文が他の方の小説と比べて　非常に短くなったり、改稿が不適切だったりするかもしれません

第0話　プロローグ

ーボクハ　ダレナンダロウ？

いつも　そんなことばかり　かんがえていた。

ーボクハ　ナニヲスルベキヒトナノダロウ？

その魂（ひと）は　人から切り離され　孤独に溺れていた

ー　キミハ　ダレ？

その動物「らしき」　物は　ボクの前にひっそり姿を見せた

毛並みは汚れ　体は血まみれ　体の所々に　あざが浮かび上がっているー

ーザシュッ！

薄緑色の目に　その動物の姿が映った瞬間　その物は　消えた

同時に　頬がぱっくり割れ　液体が　顎を伝った。

彼には　何の感情もなかった

悲鳴もあけず　動きもせず　ただ、虚ろな目を動物がいた方向に向けていた。

頭をそっと上にあげると　目のあたりから　また　液体が零れ　も

う1つの液体と
一緒に頬を滴り落ち始めた。

ー　ココハ　ドコナンダロウー？

彼の身体が　一瞬　「何か」に　震えた。

ー　ココハ　ドコナンダロウー？

漆黒の龍は吠えたけり　身体から　電気を出し　纏っていた

訳の分からない不穏に隠れるように　電雲を生みだし　身体に纏う

訳の分からない不穏に怯えるように　逃げ出すように　吠えたけっていた

ー　ボクハ　ナニヲシタイノダロウ？

何がしたいのか　彼には分らなかった。

第1話　始まりの風

かつて　ある少年がその地方に巣くったマフィアを壊滅させたという。

彼は　マフィアの消滅と同時に　姿を消したという。

マフィア・ロケット団の壊滅は　遠い異国、アメリカにも伝わり
衝撃の声がアメリカを駆け巡った。

その事件から3年後　アメリカのとある地方　イッシュ地方で
様々な事柄が起ころうとしていた。

イッシュ南部に建つ　小さな町　「カノコタウン」
マメパトが飛び交い　たくさんの人が楽しそうに笑いながら歩いていく
その中を、大きな箱を抱えながら歩く女性の姿があった。

女性は、とても嬉しそうな顔をして　ゆっくりと歩いていた。
箱は白く、青と緑のリボンが結んである。　箱が揺れるごとに
箱の中から小さな鳴き声と、ポールが動いてるようなカラカラという音がしている。

女性の名前はアララギ博士。　アメリカでも屈指の研究者で
日本の噂高いオーキド博士と知り合いともいわれている。

アララギ博士は大きな家の前で止まり　ゆっくりと庭に入る。
庭に生えているタンポポの香りがわずかにアララギ博士の鼻をついた。

アララギ博士はドアを2回ノックしながら　自分の持つ箱をそっと見つめ　呟いた

「もうすぐね。　アナタのトレーナーがどんな人かワクワクしてしまうでしょ？」

その声に呼応するように　箱の中で3体の鳴き声と　3つのボールが動く音がした

第2話　旅立ち・・・の前に！

日光が差し込み　部屋を明るく照らしていた。
時計は１０時を指しており、本棚にはきっちりと本が詰められ
部屋はすっきりと片付いている。

「・・・。グレン　開けてみなよ」
メガネを掛けた青年が　机の上に置かれた箱を見ながら言う
「でもベルは？　ベル、おそいなー。８時にはくるっていってたのに・・・・」
青い服を着た青年　グレンが、煩わしそうに言う。
「全く・・・　メンドーだな」
チェレンは軽くため息をつくと　指でメガネを軽くつついた

机の上に置かれた箱は、リボンが巻かれ　中では３つのボールが
転がっているかのような音がしている

２人はしばし無言になり　箱をじっと見つめた
「３人で開けたかったんだけどな・・・まいいや　開けよう」
グレンが言い　指をそっとリボンに掛けー

「まってー！　まってーーー！！！」
一階から大きな声が聞こえ　２人は思わず驚き　ドアのほうを見る
同時にドアが勢いよく開き　１人の女性が部屋に飛び込んできた
「ー　ベル！」
２人は同時に叫び　ベルを見る
「はあ、はあ、はあ・・・・　ごめん　待たせた・・」
道を全速力で走ってきたのだろうか。汗が額から零れ落ち
息が荒く　頬がやや赤く染まっていた

「ベル？　君がマイペースなのは昔から知っているんだけどね
今日はどんなに大切な日なのか　君はわかっているのかい？」
チェレンは眉をひそめ　イライラを隠せないような口調で言う
ベルは顔を上げ　２人を見つめる
「ごめーん！　バックの整理をしていたら遅くなっちゃった！」
ベルはそういいながら　２人に近づき　箱を見る
「わあ！　この中にポケモンがいるのね　さあ、グレン　早く開けてよ！」
ベルはうずうずとしながらグレンに問いかける
「え・・・あ、うん　いいの？」
「勿論。　君の家に届いたものだから　君が開けるのが普通だろう？」
チェレンはため息をつきながら言った
「うん・・・じゃあ・・・」
グレンは言い　リボンに再び指を掛け　そっと結び目を解いていく
箱が緩み　リボンが少しずつほどけていく

チェレンとベルは好奇心を隠せず　箱をむさぼるように見ていた

「さあ　いくよ」
グレンは言い　リボンを取り　箱を開けた
中には３つのボールが転がり、そのボールから
わずかな泣き声が聞こえている
グレンはそのボールをつかみ取り　一気に天井に放り投げた

３つのボールから光があふれ　光は床に止まり　ボールは音を立て
３人の足元に転がった
「わあ・・・」
３人は、ボールから出てきたポケモンをまじまじと見つめた

パンツを穿いた豚のような赤いポケモン　「ポカブ」
しなやかな体を伸び伸びと伸ばす　草蛇のようなポケモン　「ツタージャ」
ソバカスをつけたラッコのような人型ポケモン　「ミジュマル」

3匹のポケモンは、3人を見上げながら、鳴き声をあげた
「俺のはこれ！　前から欲しかったんだ！」
グレンは言うと　草蛇のようなポケモン、ツタージャを抱き上げる
「タージャタジャ！」
ツタージャはそう鳴くとグレンの手をするりとすり抜け　首に絡まるように
捕まり、そっと下の2匹を見つめる

「じゃ僕はこれかな？　草に強そうな感じがするだろ？」
チェレンはグレンのツタージャを見て微笑み　そっとポカブを抱き上げる
「ポカポカ！」
ポカブは鼻から火花を散らし　チェレンに甘えた

「あー！　アタシが選ぼうと思っていたのに・・・」
マイペースなところが仇となり　ポケモンを選びそびれたベル
「ミジュミジュ！」
ミジュマルはそのおっさんかのような加齢臭をわずかにちらつかせ
ベルの足元に擦り寄る
「まいっか！　コイツもなんとなくかわいいし！」
ベルはそういうとミジュマルを抱き上げ　微笑んだ

「さあ行こう！　旅に出発だ！」
「ストップ」

ツタージャをボールに戻し　扉へと走り出したグレンをチェレンが止める
「早速だけどバトルしょうか？　３人それぞれで」

チェレンは言い　ポカブをボールに戻す
「ふえええっ・・・・もう？」
ベルがめんどくさそうに　でも少し楽しそうに言う

「じゃあ今すぐはじめようか！　行くぜ！」
グレンは言い、ツタージャを繰り出す

第3話　バトル！　バトル！　バトル！

「ふ・ふええ・・・　ミジュマルちゃん、たいあたり！」

「ポカブ。かわせ！　たいあたり！」
ミジュマルが最後の力を振り切り　体当たりを繰り出すも
ポカブは軽やかな足取りでミジュマルをかわし

ドーン！

背後からのポカブの体当たりでミジュマルは吹っ飛び　本棚に勢いよく
打ち付けられ　多くの本と一緒に崩れ落ち、床に伸びた

「最初にしてはよくやったよ　ベル」
チェレンは言うとポカブに笑いかける。
「ミジュマルちゃん！　さすがチェレン。強いね・・かなわないよ」
ベルはミジュマルを抱き上げ、言う

「じゃ　次は俺の番だな　チェレン！」
「望むところさ　グレン」
グレンは叫び　ツタージャを繰り出す

「ツタージャ　電光石火！」
ツタージャは走り　ポカブは身構える
「ポカブ　かわしてスモッグ！」
ポカブはかわし　鼻を震わせたかと思うと
鼻の穴から紫の煙が勢いよく解き放たれた

「ツタージャ！」
グレンが止めるまもなく　ツタージャは思いっきり本棚にぶつかり、
その衝撃で本棚が崩れ　ツタージャの上にー

「ツタージャ！　電光石火！」
グレンが叫び　ツタージャは電光石火で走り　本棚から逃れた
ずしん、と大きな音がし　本棚が崩れ、解き放たれた煙を
押しつぶすように覆い隠した

「ポカブ！　続いてスモッグ！」
グレンはツタージャに指示を出さず　毒煙が部屋の中にたまっていく
様子をしっかりみていた。　そしてー

「ツタージャ　隠れろ！」
「ポカブ　嗅ぎ分ける！　そして体当たり！」
ツタージャは煙の中に突っ込み　ポカブはツタージャの匂いを嗅ぐ
「ふええ・・　怖いよお・・・」
ベルは毒煙を吸わないように口を押さえ　身をかがめていた

「大丈夫だ。　スモッグといっても毒性は非常に薄いからな。」
チェレンは言い　煙の動きを見る
煙がわずかに途切れ　わずかにツタージャの尻尾が見えた

「今だ！」
その声に呼応するように　ポカブがツタージャの影に勢いよく突進
しー

ガラスが砕けるような音が聞こえ　電気の火花がわずかに見えた
ポカブが壁に当たったような音が聞こえ　チェレンは動揺を見せる
「かかったな！　ツタージャ、はたく！」

ツタージャが毒煙から抜け出し　尻尾を思いっきり振った
尻尾が生み出した旋風はスモッグを巻き込み　ポカブに降り注ぐ
「ポカブ！　ポカブー！」
チェレンが叫び、煙はポカブをじわじわと痛めつけ、煙と風は
窓ガラスにも降り注ぎ　窓ガラスを割り、外へ出た

煙の大部分が消えた後に残ったのは　テレビを突き破り、壁に当たった
ポカブの姿だった。　テレビの大部分が破損され　火花が散っている。

ツタージャはグレンの足元に着地すると、倒れたポカブを見つめた
「なるほど　ポカブは　テレビに映った「影」を追ってテレビに当たった訳か
でも、煙で日光が遮られていたのにどうして影がー」
チェレンはポカブを戻しながら言う
「ツタージャが毒煙の中を走り回ったのは　ポカブを錯乱させるための
他にももう1つあったんだ。」
グレンはそう言いながら、ツタージャを戻す
「匂いを部屋中に残し　煙をわずかに動かしながら、日光が上手くツタージャを映す事を狙った」
チェレンはメガネを押し上げ、言う。　そして、割れていない窓のほうを見た
日光が部屋に降り注ぎ、部屋全体に日光を分け与えていた。

わずかな煙と　テレビ、窓、本棚の残骸が散乱し、周りを汚していた
「相変わらず、戦術が上手いな。　すごいとしかいいようがない」
「へへっ　まあな」
グレンは笑い、ボールを見つめる

「さっさとポケモンを回復させて旅に出ようぜ！」
「その前にアララギ博士にお礼を言いに行かないと！」
グレンの言動を追うようにベルが言う

「そうだな・・・　全く　メンドーだな」
チェレンは言い、ふっとため息をつくと　再び時計を見た
時計はもう１１時近くなっていた

３人は互いを見て　旅立ちへの思いを感じながら
ボロボロになった部屋を後にした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9636t/

ポケットモンスター　～真理と心理～

2011年10月9日07時29分発行